ヒョウモンとの初めての出会いがどこであったかは定かでない。本種ときわめてよく似たコヒョウモンがいて、その項で本種との違いを詳しく述べているように、野外でみただけでヒョウモンチョウだとは断言できなく、おそらく何度も通った信州のどこかで初の出会いを果たしているはずである。確実な記録だと思えたのは、ここ数年親類3家族で信州ドライブ旅行を継続しており、2010年7月22日に白馬五竜高山植物園を一周する山道でみた個体で、前翅外縁部が直線的である点でヒョウモンチョウだろうと推定したが、以下に示す本年（2013）の記録と比較すると、むしろコヒョウモンの特徴：前翅表1b室の2紋がほぼ同大で融合しているように見える。

2013年7月25日、親類とのドライブ旅行で3年ぶりに訪れた霧ケ峰高原はニッコウキスゲが満開という絶好のタイミング。しかし、高原は強い風が吹き抜けてニッコウキスゲやワレモコウ、イブキトラノオなどが大きく揺れ動く状況で、以前みたヒメシジミなどが飛び遊ぶ光景は期待できないと覚悟し、ひたすらニッコウキスゲを楽しみながら遊歩道を歩く。大勢の観光客が行き来するその道は小岩があったりして足元にも気をつける必要があるのだが、そのおかげで目線を落とした路傍に、新鮮なヒョウモンチョウが強風をさけてじっとしている姿が目に入る。みごとに美しい個体なのに、このチョウに気づく人はひとりもいない。思わず「きれい！」と声をあげて親類にも知らせてみてもらう。前翅外縁部が直線的であることからヒョウモンチョウだとみなせるが、嬉しいことにゆっくりとした翅の開閉もして見せてくれ、コヒョウモンとの区別判定に好都合の写真撮影記録がとれる。1）前翅表1b室の外縁近くにある2個の黒紋の大きさが内側で小さく、かつ両者が分離している、2）後翅裏面にみられる白帯が、コヒョウモンではきわめて明瞭であるが、本種は不明瞭、というこれら2点の特徴からヒョウモンチョウであると判定できる。2010年7月の個体は当時の位置関係からどうしても裏面の撮影記録がとれない状況で、野外撮影記録だけで種を同定することがいかに困難であるかを知らしめることにもなっている。

本種はコヒョウモンと同じく北海道と本州に分布し、白水標準図鑑には、"両種の混生地でもすみ分ける場合が多く、コヒョウモンが湿潤な草原あるいは畦畔などの湿地に多いのに反し、本種は乾燥した草原に多い"、と記されている。筆者の印象ではヒョウモンチョウは限られた地域でしかみられない珍しいチョウである。ヒョウモンチョウ類の多くはスミレの仲間を食草としているが、本種とコヒョウモンはシモツケ、ワレモコウの仲間を食草としている。ついでに触れるなら、絶滅が危ぶまれるヒョウモンモドキの食草はタムラソウ、キセルアザミというアザミ科植物で、ウスイロヒョウモンモドキはオミナエシ、カノコソウ（オミナエシ科）が、コヒョウモンモドキではクガイソウが食草となっている。

本種は近縁種のコヒョウモンとの判別が難しいことを上述したが、2017年、さらにややこしいことに、ヒョウモンチョウがキタヒョウモン（準絶滅危惧）とコウゲンヒョウモン（絶滅危

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.

惧Ⅱ類）の 2 種に区別されることが交配実験に関する研究よって明らかになったと、最新刊の日本チョウ類保全協会編「フィールドガイド：日本のチョウ」（2019 増補改訂版, 誠文堂新光社 ）に明記されている。

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.